

## 日向國海岸砂丘地域の研究 (三)

### 小 牧 實 繁

聚落立地附近に於いては、風砂に對し住居並びに耕作物を防護するため、團竹ダンチク又は金竹キンチクが植ゑられ、また麥藁垣が施されてゐる。前者は砂地に適し一ヶ所に簇生し根元より小枝を出し密集する性質を有する故砂丘地の垣根として適するが、これが植栽は餘り多くはなく、麥藁垣が多く作られてゐるやうである。

當地方海岸砂地の作物としては、林進士氏によれば、從來は、夏は甘薯・西瓜・大豆・粟等が作られ(陸稻は早魃のため不可)、冬は麥が作られたが、近來は、夏作としては南瓜・西瓜・その他の瓜類・茄子・トマト・煙草(米葉は殊に砂地によろしい)等が作られ、秋は大根、冬は麥が多く作られるやうになつた。而して近來當地方海岸砂地が促成栽培に利用せられるに至つたことは特に注意せられなければならない。林氏によれば、當地方海岸砂地には早作り(半促成栽培)が最も有利である、夏の南瓜、秋の大根(尾張大根)がその主なものであるが、その他にも種々のものが作られる。例へば臼井豌豆が三、四月の頃から霜害のない砂地を利用して露地栽培せられたり、胡瓜が宅地附近の油障子を利用する温床で促成栽培せられたりするが如きである、かかる早作りは土佐及び尾張から

の移民がその技術を傳へたものである、以前當地方に於いて甘蔗が作られ、それから砂糖が作られたが、土佐人はそれに甘藷を原料とする餡を粉末としたものを混じ、トウモロコシ(中等黒砂糖)を作つて成功した傳統などもあり、その後も早作りの技術を有つた土佐人が入つて、砂丘地の開墾を行ふと共にその技術を傳へ、また一方千切大根の本場である愛知縣からの移民が入つて(移民は縣にて招致することもあり、また自然のものもある、大正九年頃より特に多くなつた)砂丘地の開墾を行ひ尾張大根の栽培を教へたのである、前述の如く、南瓜と大根とがその主な作物であるが、今や前者は京阪神地方は勿論、東京・仙臺方面にまで進出し、岡山眞白南瓜及び之より更に優秀な千葉黒皮南瓜が産出せられるに至り、而も此等は土佐ものより一週間ばかりも早く出廻る關係上、甚だ有利であり、大根も今や尾張のそれに對抗し、殊に北九州から滿鮮地方に對しては優位の地利を占めてゐる、灌水は朝夕井戸水を利用するを以て足りる、と言ふ。

然らば土佐人は今此の地に於いて如何に活動してゐるか。又その移住の發展は如何であつたか。これを當地在住の土佐人に聽いて見よう。今より約十年前土佐より來り、茄子・胡瓜・西瓜等の促成栽培を試み一年成功し昭和二年その作物を京阪地方にまで送つたが、一朝暴風のため頓挫を來し今は沿岸漁業に雌伏してゐると云ふ一土佐人は語るのである。

明治四十二年故濱口雄幸氏が大阪鹽專賣局長時代土佐に於ける鹽田は廢止せられ、海岸地方民は四乃至五百圓の賠償金を得、養蠶並びに甘藷の栽培に更生することとなつたが、大戦以來鹽濱に於ける促成栽培(胡瓜・茄子・西瓜・トマト等の)が盛となり、一時胡瓜が敦賀から火・土曜兩日の定期船により浦潮方面にまで輸出せられたくらゐであり、非常の收益を得、貧民階級も中産階級となり、

從來各村とも山ノ手に共同井戸を有するに過ぎなかつたものが、今や各戸に井戸を掘る（一個約百圓を要する）に至り、高知縣全海岸地方で年額八百萬圓に達する促成栽培物を出し、從來の沿岸航路によらず直接大阪に輸送するに至つたが、後漸く他縣の競争が始まり、南瓜では遂に宮崎縣に壓倒せられるに至り、高知縣より宮崎縣への移民を見るに至つた、以前は裸一貫の移民が多く中には數十萬の産をなすものもあつたが、現今では數萬の資本を有ち來るものも多くなつた、興味あることに、日向人はブラジル・滿洲等に出稼し、土佐人は日向に來るのである（宮崎縣は移民招致をやるのであるが、土佐の移民は多くは個人個人で來り永任的となつて來た）、日本では北海道と宮崎縣とが移民に對する國庫補助を有するのであり、家屋の建築を行へば全建築費の四割（一家族約四〇〇圓）の補助を受けることが出来る、土佐移民部落の代表的なものは金吹山の如きもので（前記新聞の記事と若干の相違がある）これは十數年前より促成栽培を目的とする高知縣人の部落である（赤江農場の經營は東京某氏の出資によるとか）と言ふ。因みに此の話者は目下沿岸漁業に雌伏中であること前記の如くであるが、何人かの漁夫を使役し十一月末より四月下旬までの漁獲期にサハラ（三才以上のもの）・サゴシ（二才以下のもの）・チダヒ・アデ・カマス等を汽車便により京・阪・神殊に大阪中央市場に送ると言ふ。

最後に當地方海岸砂丘地域の原始景觀に就いて述べ度いが、これに就いては今日明確には何事も語り得ないと言ふの外ない。原始景觀に就いて何事かを察知し得る重要な手掛りは、先史時代遺蹟並びに遺物であること多言を要しないが、現在に於ける此の方面の材料はなほ甚だ不充分である。當地方海岸先史時代遺蹟に就いては、筆者も實地踏査中相當注意を以て觀察したのであるが、短

時日の踏査に於いては殆んど何等獲る所がなかつた。殊に砂丘中の遺蹟らしいものは何等發見することが出来なかつた。併しながら當地方海岸砂丘地域が全然先史時代遺蹟を缺くと速断することは出来ないやうである。宮崎神宮徴古館所藏の左の如き遺物は當地方海岸地域に於ける先史時代遺蹟の存在を物語るやうである。

櫛村字保壽庵ホシエアン

彌生式土器(新らし)

同村字山崎

彌生式土器

同村字産母

同

同村字中原

同

住吉村字芳士

同

大宮村字村角

繩紋土器

赤江村字松崎

有紋土器(一個、疑はし)

住吉村字鹽路海濱(歌津肇氏發見)

彌生式土器(埴の完形品)

櫛村字江田

石斧(石棒様)一個

同村字下江田(中原新一氏發見)磨製石鏃四個

同村字保壽庵

祝部土器、鐵劍

住吉村字芳士

祝部土器

櫛村字江田乙名牟田オモナ

祝部土器

尚、宮崎縣史蹟調査主事瀬之口傳九郎氏の直話によれば、乙名牟田(山崎の南方)の田圃中より磨

製石斧一個と彌生式土器破片とを出だし、また産母神社境内及び海岸から彌生式及び祝部式土器を

出だしたとのことであり、日向の聖地傳説と史蹟、(宮崎縣、昭和九年)四八頁には「海岸のもの

の村には、北方江田から新別府のあたり十數の古墳を見るべく」との記事があり、また古く故坪井

正五郎博士が人類學雜誌第十四卷、第百五十八號に石器發見地名表を掲げられた中に、宮崎郡、島

ノ内・芳士・折生迫・廣瀬、兒湯郡、日置ヒキなどの名が見え、また日本石器時代遺物發見地名表第五

版に、宮崎郡、村角字高屋(石器)・廣瀬村大字廣瀬(石器)・住吉村大字島之内(土器・石斧)・芳土(石器)・青島村大字折生迫(石器)、兒湯郡富田村大字日置字今別府(打石斧・磨石斧)等の地名が見え、同追補一に、宮崎郡榎村字浮ノ城(磨石斧・彌生式土器)の名が見えるから、當地海岸砂丘中に先史時代遺蹟が全然存在しないとするのは早計であるのみならず、當地方に於いては海岸砂丘地域中にも恐らく先史時代遺蹟は存するものと考へられ、將來に於けるその確實な遺蹟の發見は、當地方海岸砂丘地域の案外古く、且つその砂丘が既に早くより固定せられてゐたことを證明するに至るものと察せられる。

(昭和十年七月十二日稿了)

附記 本研究は帝國學士院の補助に負ふところが甚大である。銘記して厚く感謝の意を表す。また宮崎縣耕地課中岡俊一、同前耕地課長林進士、同史蹟調査主事潮之口傳九郎、宮崎縣立圖書館長若山藏六、妻中學校長松本博の諸氏からは多大の御示教を忝くし、また臨地調査に當つては一々氏名を御聞きしなかつた幾多の人士から數多の御教示を賜つた。茲に謹んで深謝の意を表し度い。

註(一) 日向見聞録(宮崎縣立圖書館藏本)に

青嶋神社 折生迫ノ濱ヨリ一町餘ヲ去テ海中ニ嶋アリ平日ハ漁舟ニアラサレバ到コトアタハズ毎春三月十五六日頃濱ト島トノ間鹽水盡ク干枯テ男女履ヲ着テ青島ニ至ルコトヲ得因テ近來拜禮ノ者如レ林

とあり、日向地誌、二八三頁(日向地誌刊行會刊本)に

青 島 尖リ濱ヨリ二三町離テ海中ニ浮出タルカ如キ小島ナリ潮退キシ時ハ足ヲ踏サスシテ至ルベシとある。

註(二) 日向地誌、二八二頁、折生迫村の條に

尖濱松林 本村(小牧註、折生迫村)ノ北尖リノ海濱(小牧註、青島ノ西方)ニ連ナル東西幅平均四十間南北長凡十三町木數詳

ナラス圍二三尺ヨリ四五尺ニ至ル民有  
とある。

註③)日向地誌、二六六頁、熊野村の條に

正蓮寺内隄 木花山ノ東麓ニアリ寛文二年壬寅九月十九日ノ海溢ニ陥テ海トナリシヲ享保中之ヲ築テ隄内ニ新田ヲ開ク隄東

西八町高六尺數八間馬踏三間水門ニケ所修繕官費

正蓮寺外隄 内隄ノ外ニアリ東西十五町餘文政ノ頃築ク所ナリ隄數十間高一丈餘馬踏三間處々ニ根堅ノ篠簞アリ水門三ヶ所  
修繕官費

とあり、寛文の地震による地變については、同書二七三頁に

加江田村 寛文二年壬寅九月十九日ノ海溢ニ下加江田ヨリ本郷ニ至ルマテノ地過半陥テ海トナル其周圍七里三十五町田畑高  
八千五百石餘ニ及ヘル中ニ殿トビトコ所ト云字地ナトアリ青島ト相並テ東ニ突出セシ所ナリト云ヒ傳フ 橋三喜一宮巡詣記ニ云熊  
野原ヲ過行キタサシト云所ヲ(今其地名ヲ失ヘリ或ハ三喜)通リケルニ入海廣ク見エタリ近キ頃マテハトントコロト云村アリ  
シカトモ大地震ニ津浪來リテ今ハ入江ニ成タリト聞テ初潮ニトントコロビテ家モナシト云々 按スルニ三喜ガ此地ヲ通行セ  
シハ延寶三年乙卯九月十七日ナリ寛文二年ノ地震ヨリ僅ニ十四年ヲ經今ノ正蓮寺隄ハ未ダ築カヌ木花山ノ麓マテ皆一面ノ灣  
海ナリ故ニ云爾

と言つてゐる。

註④)曾山寺の渡に就いては、日向地誌、二六五頁に

鵜ノ木渡 本村(小牧註、熊野村)ヨリ加江田村ニ至ル木崎川加江田川相會スル所ニアリ渡船一艘アリ

とあり、また同書二七六頁、加江田村の條に

曾山寺渡 即チ鵜ノ木渡熊野村ノ部ニ詳ナリ渡船二艘アリ

とある。因みに此の附近の水面には鱸・鰯・鮒・鮓などを産し、また海岸には製鹽が行はれたらしく、同書二六八頁に

熊野村物産 鱸三百尾 鰯二千尾 鰯兒一萬尾 鰻二百貫匁 海老 鮒 蛸蛤ノ類モ亦多シ 蠣灰四十石 鹽五十石  
とあり、また同書二七九頁に

加江田村物産 鰯二千尾 鰯兒一萬尾 鰻三十貫匁 鰯鮒ノ類多シ

とある。

註(6) 日向地誌、二六五頁に

木崎川 宮崎郡清武川ノ下流 本村(小牧註、熊野村)ノ東北涯ヲ繞リ鶴ノ木ニ至リ加江田川ト相會シテ海ニ入ル  
とある。

註(6) 日向地誌、二六二頁に

郡司分村物産 鰻六百貫匁 海老鮎ノ類極テ多シ  
とある。

註(7) 日向地誌、二五九—二六〇頁、郡司分村の條に

海濱ノ地ハ木崎川ヨリ田吉村マテ南北二里ニ亘リテ潮汐吞吐ノ所アリ是ヲ蠣原ト云 寛文二年壬寅九月十九日ノ地震ニ陥テ  
灣海トナリシヲ後年其口ニ横隄ヲ築テ水門ヲ設ケ潮汐ヲ通シ其兩側ヲ水田トナス 漸次ニ地埋ルニ隨ヒ又其外ニ重隄ヲ築キ  
今ハ故隄新隄アリ此ノ潮筋大潮ニハ幅十四五間ノ川トナル洪水ノ時ハ南ハ清武川北赤江川ト相通シテ一川トナリ稻田水ニ浸  
ス數日ニ及ヒ時々水害ヲ被ル且其東海ニ瀕スルヲ以テ動モスレハ潮風ノ害ヲ免カレス

とあり、又同書二六一頁に

内蠣原故隄 蠣原ニアリ東西長四町許南北幅八間高九尺水門五ヶ所修繕官費

外蠣原新隄 蠣原ニアリ東西長二町許幅八間高六尺水門六ヶ所修繕官費

とある。因みに寛文の地震による地變については註(3)を参照すべく、又、高鍋藩、藩史備考、十一、延陵世鑑卷之二(宮崎縣  
立圖書館藏本)に

寛文二年壬寅九月日向國中大地震ナリ中ニモ宮崎那珂ノ兩郡甚タシク山崩レ谷埋レ民屋ノ破損ハ員ヲ知ラス海邊ノ田畠海ト  
ナルコト凡七八千石ニ餘レリ常ニ潮ノ満ニ岩頭ヲ涌ス處地震後ハ岩頭三四尺海底ニ在リコレヲ以見レハ地ノ陷ルコト三四尺  
餘ナルヘシ前代未聞ノ大地震ナリ

とあり、日向纂記、卷十六、一三—一三丁(明治十八年刊本)に

日向國大地震ノ事 寛文二年壬寅九月十九日ノ夜子ノ刻日向ノ國地大ニ震シ且ツ津浪俄ニ來リテ那珂那ノ内下加江田本郷所  
々ノ地(故老ノ話ニ青島並東ニ出シ村七ツ殿所村ナト云ヘル所アリシカトモ寛文ノ地震ニ陥テ海ト成レリト今寛文以前ノ

檢地帳ヲ閱スルニ唯上加江田村下加江田村本郷郡司分村本郷南方村本郷北方村等ノ村名アルノミ。サレハ所謂七ヶ村ハ下加江田及ヒ本郷ノ内ニアル小區ノ名ナルヘシ。陥テ海トナルコト周回七里三十五町。田畑八千五百石餘(一ニ八千石餘ニ作ル蓋シ其大數ヲ舉ル歟或ハ五百ノ宇ヲ脫セシ歟)ニ及ヒ米粟二千三百五十石餘流失アリ。潰家千二百十三戸ノ内陥テ海ニ入ルモノ二百四十六戸其人員二千三百九十八口ノ内溺死十五人牛馬五頭ニ及ヘリ(中略)誠ニ古今未曾有ノ大災ナリ(伊東姓)とあり、佐土原地震集記(赤江町郷土史調査部、うつり行く赤江、昭和五年六月謄寫版による)に

寛文二年九月十九日夜大地震あり伊東領内本郷の一在所田地九千石播り沈め海となる其の村々の人家屋敷の圍ひ竹木まで播り沈め木も竹も柱も海中より立てり人は丘傳ひにて上り幸ひに死人少なし彼の一在所は全く入海となる魚も多く入り込めども家の柱や竹木沈み立ちて網を下すこと叶はず辰巳午未申酉の方は伊東領にて地震最も大動搖なり戌亥子丑寅卯の方は佐土原領にて此は小動ぎなり

とあり、日向の聖地傳説と史蹟(昭和九年刊)四四頁に

小戸神社 元大澁川口の下別府村に鎮座あり。然るに寛文二年の震災により下別府部落は海中に没して其の地を失ひ、社地社殿も亦其の難に遭つて陥没した。依て本社を一時上別府大渡の上に奉遷した。今の元宮町に其の址がある。同三年十一月新に社地を上野村に築て遷幸し近年に及んだが、昭和八年一月宮崎市内下水流町に移轉遷座せられた。

註(8) 日向地誌、二四八頁、田吉村の條に

海濱松林 東西二町餘南北凡一里而積三十四町五段二畝二十歩木數凡三萬四千株周圍二三尺ヨリ五六尺ニ至ル民有とある。

註(9) 此の附近水田の灌漑は松井五郎兵衛の功績に負ふところが大である。五郎兵衛の事蹟については、日向纂記、卷十六、八

丁に

松井五郎兵衛清武岩切村ニ新溝ヲ鑿ル事 清武岩切村ノ新溝ハ松井五郎兵衛シナガ儀長カ工夫ニテ慈雲公ノ時寛永年中新ニ鑿リシ所ナリ(松井家譜、新溝碑銘、故老話)とあり、宮崎縣嘉績誌、(大正四年、宮崎縣刊)七二―七五頁に

松井五郎兵衛儀長、飯肥藩の人なり、寛永の頃飯肥領清武郷に居る、清武郷八箇村岩切・南方・北方・恒久・田吉等の各部



落は田地約二百二十二町歩餘あり、然るに給水不足僅に天水を待て播種挿秧するを得るのみ、五郎兵衛、自ら實地を踏査し詳に地勢を考へ、須田木岡に隘道を穿ち清武川を引て灌漑に供せんことを企つ、寛永十六年十二月工を起す、五郎兵衛時に年七十歳、村民喜んで役に従ひ他村亦來て工を助く、遂に能く延長二里十五丁の大水路を竣工せり、時に寛永十七年三月なり、斯くて剩水を利し新に開田したるもの亦四百四十五町歩に達せり。

とある。(此の記事は、日向地誌、那珂郡那誌、人物の項、一六七—一六八頁に見える松井儀長五郎兵衛の事蹟の記事と殆んど同様である)。

註10) 日向地誌、七頁に

赤江川 古ハ赤井川トモ云今或ハ大淀川ト呼フ蕩決ノ勢ナケレハ下流ハ砂磧埋没シテ海口ハ年々淺シ今ノ赤江町古ハ今ノ城ケ崎町ト比ヒシカ 寛永二年壬寅ノ大地震ニ海溢ノ害ヲ蒙リシヨリ今ノ地ニ移セリト聞傳フ

とあり、同書二四七頁、田吉村の條に

赤江町 相傳フ此町古ハ今ノ城ケ崎町ト比ヒ赤江川ノ南岸ニアリシカ寛文二年壬寅ノ大地震ニ海溢ノ害ヲ蒙リシヨリ此地ニ移セリト

とある。

註11) 日向地誌、二三五頁、吉村の條に

松熊神社 村社 諸冊二尊及ヒ速秋津彦命ヲ祭ル舊名松熊大明神ト云明治四年辛未今ノ名ニ改ム 例祭三月十三日

とある。

註12) 日向地誌、二二八頁に

江川村物産 鱈三百尾 鰻十五貫匁 鮒五籠 川海老五斗 蛸五斗

とあり、同書二三一頁に

新別府村物産 鱈兒五千尾 鰻十貫匁 鮒三籠 川海老五斗 蛸五斗

とあり、同書二三五頁に

吉村物産 鱈五千尾 鱈兒一萬尾 鰻千五百貫匁 鯉五十尾 鯰五百尾 蛸一石 田螺五斗

とある。

註13)日向地誌、二三一頁に

一葉神社 村社 本村(小牧註、新別府村)ノ東海濱ノ松林中ニアリ 倉稻魂命ヲ祭ル 例祭十月十四日

とあり、日向の聖地傳説と史蹟には一ツ葉を伊弉諾尊筑紫日向の小戸の橘の阿波岐原に禊祓給ひし傳説地となし、この海岸地方を今も楯と言ふ(今、宮崎市新別府町のうち)としてゐる。

註14)續日本後紀卷六に

承和四年八月壬辰朔日向國宮崎郡江田神預ニ官社

とあり、三代實錄卷一に

天安二年十月廿二日己酉授日向國從五位上江田神從四位下

とあり、延喜式、卷十、神祇下に

宮崎郡一座小 江田神社

とあり、知名抄九に宮崎郡江田郷が見える。日向見聞録には

江田ノ神社 江田村之神社ハ式内社也楯原住吉大明神ト號ス所祭之神ハ底筒男命中筒男命表筒男命也 一書ニ云八十柱津日  
神神直日神ヲ祭ルト云亦是伊弉諾尊楯原中ツ瀬ニテ化生スル處ニシテ九神同體ナリトイヘトモ 住吉大神ト稱スル時ハ表底中  
ノ三神ニ限ル習ナレハ一書ノ説ハ如何侍ラン乎

となし、日向地誌二二八頁には

江田神社 縣社 本村(小牧註、江田村)ノ東北隅産母ニアリ松林中ニ鎮座ス故ニ土人産母神社トモ呼フ表筒男命底筒男命ヲ  
祭ル 日向國式内四座ノ一ナリ

としてゐる。阿波岐原に就いては日向見聞録に

楯原三瀬 一古老傳ヘ云海原ノ三瀬川原ノ三瀬ト云フコトアリ 先ツ海原ノ三瀬トハ鹽路村住吉大明神ノ沖ヲ上瀬ト云江田村  
江田神社ノ沖ヲ中瀬ト云下別府村ノ沖ヲ下瀬ト云也 (下略)

とあり、日向地誌、二一四頁に

楯原三瀬 楯原ノ地諸説紛紜ナレドモ土人ノ古ク傳フル所ヲ以テスレバ本村(小牧註、鹽地村)ヨリ南吉村ニ至ルマテノ海  
上ナリ日向舊迹見聞記云故老相傳フル説ニ海原ノ三瀬川原ノ三瀬ト云コトアリ海原ノ三瀬トハ鹽地村大明神ノ沖ヲ上ノ瀬ト

云ヒ江田神社ノ沖ヲ中ノ瀬ト云ヒ下別府村ノ沖ヲ下ノ瀬ト云

とある。

註16)日向地誌、二二八頁、江田村の條に

御池 産母神社ノ東北四五町海濱平沙ノ中ニアリ其形長クシテ稍圓ナリ經四十間緯十五間深一俵ニ過ス其水清澄ニシテ一塵埃ナシ海水ト共ニ滿洞アリ而シテ毫モ鹹氣ナシ亦一奇池ナリ其産母神社ノ側ニアルヲ以テ今ノ名アリ池水小魚多シ土人之ヲ漁スレハ靈祟アリトテ敢テ漁セス  
とあるのは之れに當るであらう。

註16)日向地誌、二一〇頁、島ノ内村の條に

長池 東西一町五間南北五町十二間深六七尺凡十三町

とあり、同書、二〇九頁、同島ノ内村の條に

長池溝 長池ヨリ起リ鞍懸ニ至テ二派ニ分ル一派ハ北ニ流レ茶夷原池ニ入ル長十町許幅三尺田凡十町ノ灌漑ニ供ス  
とある。

註17)日向地誌、二一四頁に

住吉神社 村社 本村(小牧註、鹽地村)ノ海濱松林蒼鬱中ニ鎮座ス底筒男ノ命中筒男命表筒男命三柱ヲ祭ル例祭九月十三日  
とある。

註18)宮崎縣嘉績誌、六七—六八頁に

長友幸次郎は嘉永五年八月宮崎郡住吉村大字鹽路に生る、(中略)或は甘藷の栽培を盛にして鹽路餘の産額を増さしめ或は柑橘果瓜の栽植を奨励し、或は海濱の松林に遊離蜜素を利用して葎科植物の播種を企つる等銳意殖産の方法を指示實行せしめ(中略)翌年(小牧註、明治三十六年)には長溝・中島・坂原の三字に開墾・整理・排水の工事を施して良田九町五反餘を得たり。  
とある。

註19)日向地誌、三三—三四頁に

村角村 園村平坦砂土乾燥ニシテ濕氣ナシ畦圃ノ傍處々ニ苗松林多シ水利ハ便ナラス旱歲ニハ必ス苦ム  
とあるから、明治初年頃此の附近に松の栽植が行はれたことが察せられ、また砂丘地の耕地への利用が行はれてゐたことが知

られる。尙、村角に因んで、日向見聞録に

高屋八幡 村角村 所祭之神ハ一座ナリ彦火々出見尊八幡大神也當社ノ西ニ彦火々出見之山陵アリ日本紀ニ曰日向ノ高屋ノ山ノ上陵ニ葬トアルハ是也人皇十二代景行天皇之高屋ノ宮ト云ハ是也祭祀ノ日神與東ノ松林ノ内ニ行幸シ玉ヲ行宮所アリ此所ハ上代ノ皇居ト云又當宮ヲ去ルコト五町餘乾ノ方ニ大ケ城ト云處アリ是レ狗人ノ住ミ玉フ處也則チ火酢芹命之舊地ト云傳フ

とあり、日向地誌、三五頁に

村角村 陵墓 犬力城塚 高屋神社ヨリ西北ニ距ル五町許田中ニアリ高一丈周圍凡一町三十間其巖雜樹ヲ生スとある。

註20) 日向地誌、一九八頁に

平良川 島ノ内村ト本村(小牧註、下那珂村)トノ中間ヲ流ル中央ハ本村ト下田島村トノ中間ヲ流レ明神山ノ北麓ニ至ル下流ハ石崎川ト云ニ派ニ分レ一派ハ大炊田川ニ入ルとある。

註21) 大淀川南方の地域に就いてであるが、日向地誌、二四七頁及び二四二頁に

八重川 恒久村ヨリ來リ本村(小牧註、田吉村)ニ入テ流ル長十一二町ニシテ赤江川(小牧註、大淀川)ニ注グ  
八重川 源藤川ノ下流本村(小牧註、恒久村)ト田吉川トノ界ニ流ル幅廣處大約十二三間上流ハ岩石ヲ以テ底トス下流ハ砂川ニシテ深淺定ラス

とある記事(傍點小牧)、及び五萬分一地形圖上に讀み得る同川流路の侵蝕情態はまたこの推測の正しいことを證するやうである。

註22) 日向地誌、六三三頁、六三六頁に

上富田村物産 鰻千尾 下富田村物産 鰻千五百尾とある。

註23) 日向全書、卷五、前編、名所概覽(宮崎縣立圖書館藏本)に

水沼神社 永祿年間の創立なりと云ふ一に湖水ケ池と稱す

とあり、日向地誌、六四四頁に

水沼神社 村社 海濱水沼ノ中央ニアリ社地廣三畝十二歩水波女神鳴雷神閻添加美命ヲ合祭ス例祭大陰曆九月二十五日ナリ  
シガ明治四年以來ハ一定セス  
とある。

註24) 日向地誌、六四三頁に

日置村 海濱松林 東西一町許南北二十四五町木圍大ナルハ四尺小ナルハ二尺官有ニ屬ス  
とある。

註25) 日向地誌、六四三頁に

水 沼 本村(小牧註、日置村)ノ東海濱ニアリ長南北四町四十間幅東西一町餘深九尺面積凡五町六段  
とある。

註26) 註24) 参照のこと。

註27) 日向地誌、六四九頁に

高鍋村海濱松樹林 北岐口浦ヨリ堀ノ内長谷ニ連ナル長凡一里幅一町三四十間木敷詳ナラス圍大ナルハ五六尺小ナルハ一二尺大約官有ニ屬ス民有少シク雜ル  
とある。因みに舊高鍋藩の潮害防備林については、宮崎縣の林業(昭和三年、宮崎縣山林會刊)一四四頁に

潮除山は主に海岸に沿ふたる地位にありて農作物の風潮に害せらるるを豫め防止する爲に伐採を禁じ永遠樹木の存立を定め  
置きしものなり

とある。

註28) 日向地誌、五二七頁に

岐口浦港 高鍋村ノ東涯海口ニアリ港口ハ東南ニ向ヒ潤縱八九町横二町許高鍋川其中ニ流注スルヲ以テ港内漸次ニ埋ル  
とあり(同書六五〇頁にも殆んど同様の記事がある)、同書六五一頁に

彈琴松 岐口浦海濱ニアリ唯圃中ニアリ其木タルヤ盤根曲幹枝葉蒼鬱之ヲ望メバ偃蓋ノ如シ 相傳フ源重之日向守タリシ  
時國詩ニ詠セシ松ハ即是ナリト

とある。(但し此の松は、日向の聖地傳説と史蹟、一三六頁によれば、四十餘年前暴風で折れやがて枯れてしまつたとのことである)

附註

前記註に引用した諸書のうち普通のものゝ高木利太氏著家藏日本地誌目錄及び同續篇に詳しく解説せられてゐるから参照せられ度い。右に解説せられてゐないだけを参考のために茲に擧げて置く。

(1) 日向見聞録 内題に舊跡見聞録とあり、笠山僧、道順懸解輯になり、「予古老ニ所聞及ヒ親ク見ル處ヲ記テ名テ曰ニ見聞録ト此書ハ聊舊記ヲ見ルノ好キ梯橙ナラン者也、寶曆九己卯年閏七月中旬」なる跋がある。宮崎縣立圖書館藏本は明治三年永友司宗義の寫本で、それは「右日州見聞錄者從笠置山直純寺借寫之正本在彼寺、于時弘化五改嘉永元戊申重陽中旬於城ヶ崎寫之」とある一本からの寫本である。

(2) 藩史備考卷之十一、延陵世鑑 白瀬永年徳卿の編輯で、享和二年三月の自序がある。

(3) 日向全書 諸書及び諸家の説を紹介収録したもので、大正二年春、永友宗年の序がある。

(完)